

# 高レベル放射性廃棄物の地層処分問題の将来 中学生と実践する産婆術

The Future of Geological Disposal of High-level Radioactive Waste  
Postpartum practice with junior high school students

\*澤田 哲生<sup>1</sup>

<sup>1</sup> 東工大・先導原子力研究所

2010年以降開催してきた『中学生サミット』において、高レベル放射性廃棄物の最終処分問題について中学生同士の対話を促進してきた。対話により、相互の疑問や矛盾点を自己発見しつつ相手が言いたくてもどう表現していいかわからないことを具体的な発言に結実させる手助けをする。これはソクラテスの問答法または産婆術の手法である。中学生の産婆術の実践により、最終処分問題の新展開の可能性が見えた。

**キーワード：**高レベル放射性廃棄物，地層処分，中学生サミット，NIMBY，対話，ソクラテスの産婆術

## 1. 緒言

高レベル放射性廃棄物の最終処分問題について、これまでに8回の中学生サミットを開催してきた。その中では、参加した中学生が最終処分の賛否や方法を巡ってゼロベースから知識を習得し、参加者同士の対話の中でソクラテスの産婆術（問答法）を実践してきた。その成果を報告する。

## 2. 対話の実践方法

### 2-1. ソクラテスの産婆術（問答法）

抽出された問題に対して、産婆術（問答法）を実践する。問答法は参加者同士が1対1で行うことを基本とする。その手順は以下の通り。1）問題に対する自己の意見を表出し合う、2）その意見を持った根拠や経緯をお互いに問いかけ答える、3）根拠や経緯が不確かな場合は、「言いたくてもどう表現していいかわからないことを」、具体的な表現として産み出す手伝いを相互にする—すなわち産婆術を施す。

### 2-2. 産婆術が産み出した具体事例

中学生サミットの中から産み出された2つの事例をあげる。

- 1）2018年のサミットに京都から参加した中学生は当初最終処分問題を「自分ごと化」するよりはNIMBY傾向が強かったが、サミット中での対話-産婆術の経験とその後のいくつかのフィールドワークを経て、この問題の主導的発信者へと変化をとげていった[1]。
- 2）2017年から参加している東京の中学生（当時）は、自らの内省的な問答を短編ドキュメンタリー「日本一大きなやかんの話」として表出発展させ、より広く一般市民と問題を共有する方途を拓いた[2]。

## 3. 結論

サミットの主催者は、場と機会の提供、そして問題の発端を情報共有するにとどめ、対話-産婆術の実践はサミット経験者（主に高校生）が自主的に構成できるようにしている。そのことが最終処分問題の若者への自分ごと化からソクラテスの産婆術の実践により解決の道へと繋がる可能性を見出しつつあると考える。

## 参考文献

[1] 上野和花，日本原子力学会誌，Vol.61，No.10（2019）；[2] 矢座孟之進，ibid.，Vol.62，No.1（2020）

\*Tetsuo Sawada<sup>1</sup>

<sup>1</sup>Tokyo Tech., LANE.